

第2期知床半島エゾシカ保護管理計画・計画期間中の中間総括

*第2期5年間：平成24(2012)年4月～平成29(2016)年3月(平成27年10月現在で3年半経過)

○遺産地域 A:

高山帯進出の懸念はあるが、越冬数に大きな変化なし。

○特定管理地区(知床岬地区):

第1期に引き続き、5か年に渡り個体数調整を実施した。先端部台地上での越冬期カウント数は捕獲実施前と比較して大幅に減少。一方で先端部(仕切り柵内)への移入が確認されている。

○遺産地域 B:

幌別・岩尾別地区:

2012年1月から実施の個体数調整の効果もあり、2012年以降、航空カウントでは捕獲実施前と比較して大幅に減少。一方で道路カウントでは、100メス比は上昇に転じている。

ルサ・相泊地区:

2010年12月から実施の個体数調整の効果もあり、2013年以降、航空カウントでは捕獲実施前と比較して大幅に減少。一方で道路カウントでは、幌別・岩尾別地区同様100メス比は上昇傾向。

○隣接地区:

斜里側:

中断期間を設けた狩猟の継続で道路カウントでは保護区外で減少傾向。保護区内においては増加傾向にあったが、2013年12月以降実施の管理捕獲の効果か2014年度は減少に転じた可能性あり。

羅臼側:

対象地域の中で越冬密度は最も低い。狩猟と管理捕獲により、一定の捕獲圧は維持されている。個体数の動向に関する情報乏しいが、減少傾向か。

※次ページ以降、各地区について詳細記載。

○遺産地域 A: 遺産地域の核心地域(幌別・岩尾別台地と知床岬を除く)。

高山帯進出の懸念はあるが、越冬数に大きな変化なし。

本地区は主に高標高地域と、(ルシヤ地区を除き)越冬地を含まない低標高地域である。高標高地域では、高山帯への進出が散見されるが、植生への影響拡大は確認されていない。よって第2期計画期間中に高標高地域への進出が加速したとは考えにくい。一方ルシヤ地区については第1期2011年と第2期の航空カウント数の比較では越冬数は減少傾向。また非越冬期にルシヤ地区において捕獲したエゾシカの季節移動調査では今のところ定着傾向が強く、大きな季節移動は確認されていない。

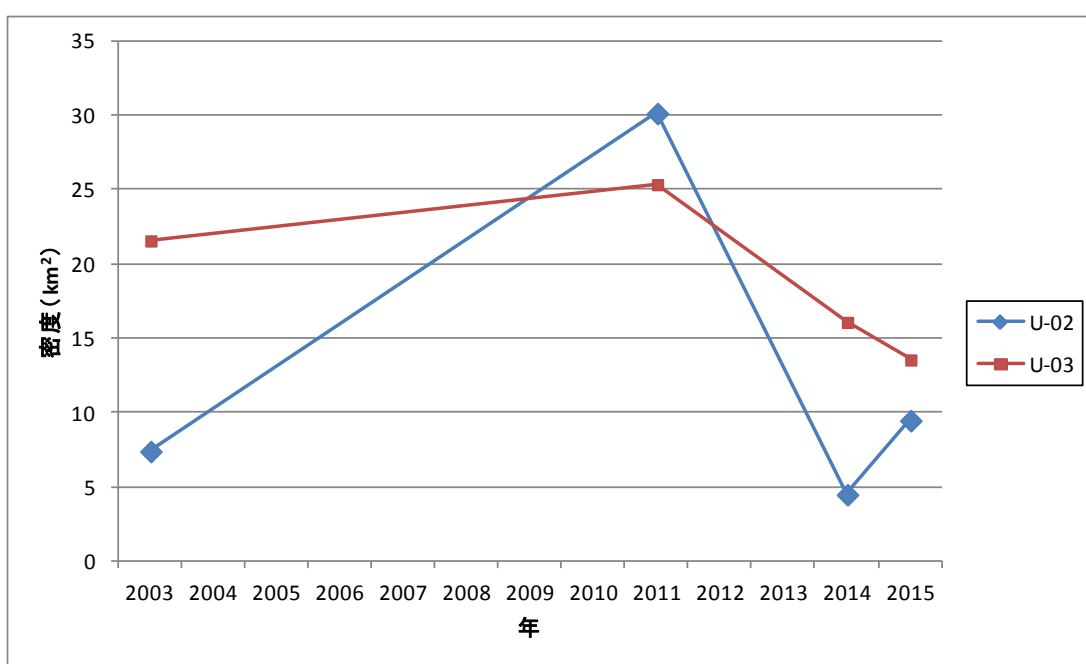


図1. ルシヤ地区(広義)の各調査区におけるエゾシカ発見密度の推移。

(U-02:ポトピラバツ〜テツパンバツ, U-03:ルシヤ〜ポンプタ)

○特定管理地区(知床岬地区)：

第1期に引き続き、5か年に渡り個体数調整を実施した。先端部台地上での越冬期カウント数は捕獲実施前と比較して大幅に減少。一方で先端部(仕切り柵内)への移入が確認されている。

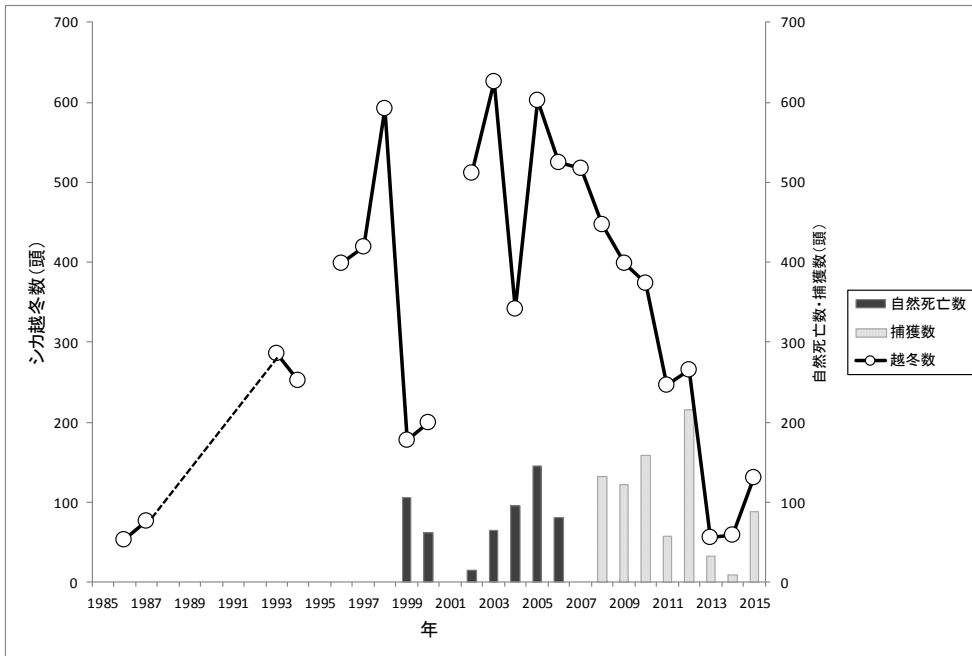


図2. 知床岬先端部におけるエゾシカの航空カウントによる越冬確認数(2-3月実施:折れ線)と春期自然死確認数(5月実施:棒グラフ)の経年変化。2008年以降の越冬確認数は、調査直前の捕獲を考慮しない未補正の航空カウント数。白丸年はデータあり、他年(点線部)はデータなし。管理捕獲実施後の自然死は大幅に減少。

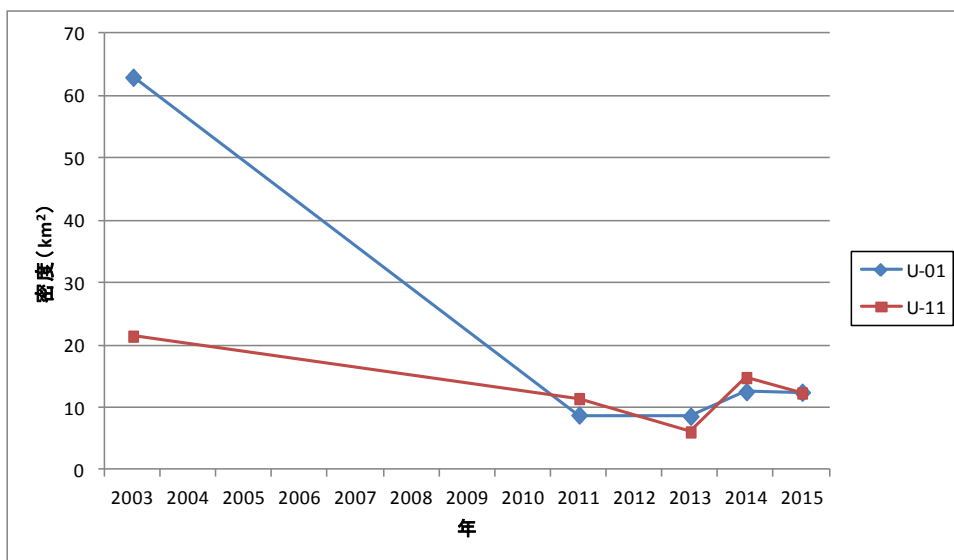


図3. 知床岬地区(広義)の各調査区におけるエゾシカ発見密度の推移。

(U-01: 岬西側 知床岬～、ポトピラベツ, U-11: 岬東側 知床岬～モイレウシ)

○遺産地域 B: 遺産地域の緩衝地域(海域を除く)。

本地域は幌別・岩尾別地区、ルサ・相泊地区の2ヶ所の越冬地を含む低標高地域である。この2ヶ所の越冬地間に個体の行き来がないと見なされることから、以下にそれぞれ別項で取り扱う。

幌別・岩尾別地区:

2012年1月から実施の個体数調整の効果もあり、2012年以降、航空カウントでは捕獲実施前と比較して大幅に減少。一方で道路カウントでは、100メス比は上昇に転じている。

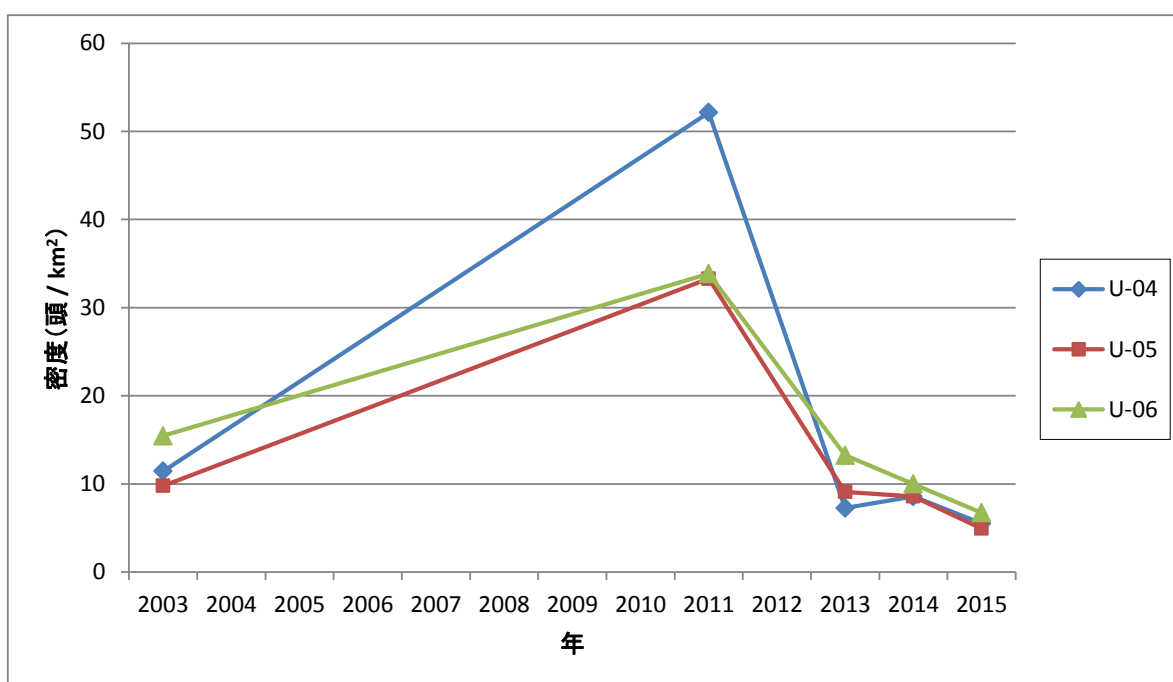


図4. 幌別・岩尾別地区(広義)の各調査区におけるエゾシカ発見密度の推移。

(U-04:ポンプタ〜知床五湖西側, U-05:岩尾別, U-06:幌別。詳細位置および区画については資料 1-3、図 1、表 1 を参照)

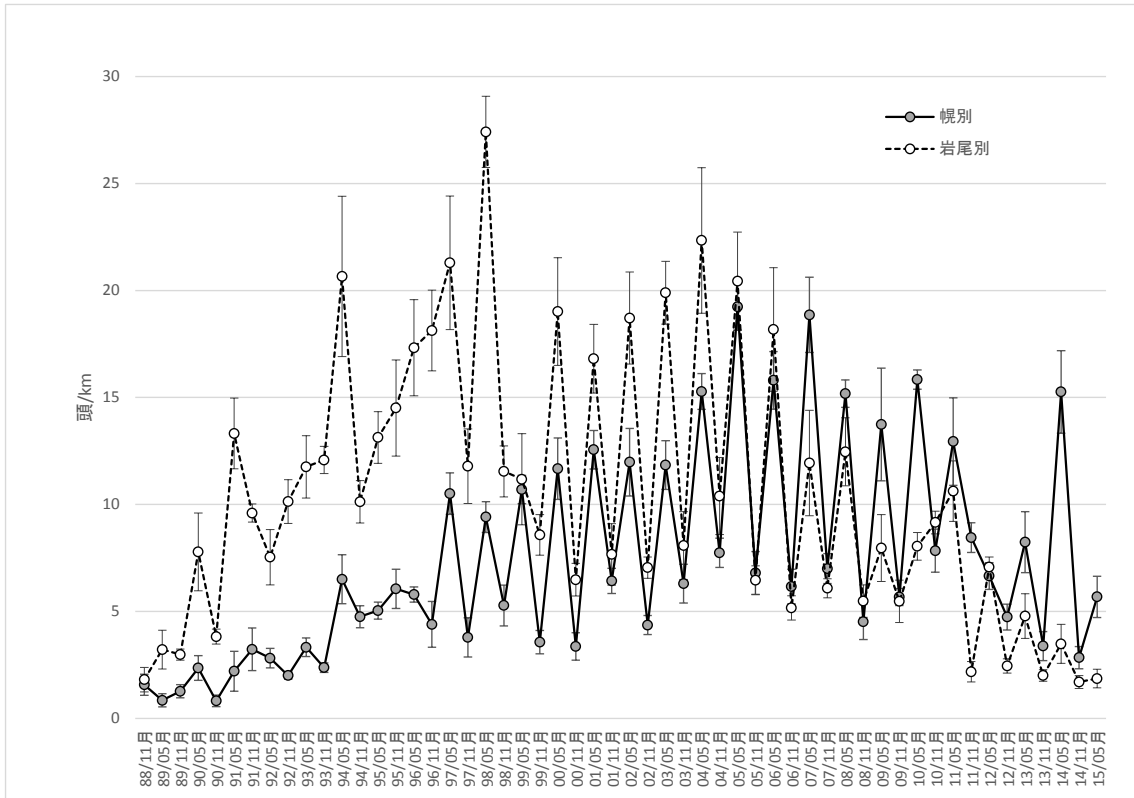


図5. 幌別・岩尾別地区の道路沿いに見られたエゾシカの距離当たり頭数の変化。5夜の平均値と標準誤差を表す。

※2014年春幌別は多雪で融雪の早い道路法面にシカが集中していたため、多数カウントされた可能性あり。

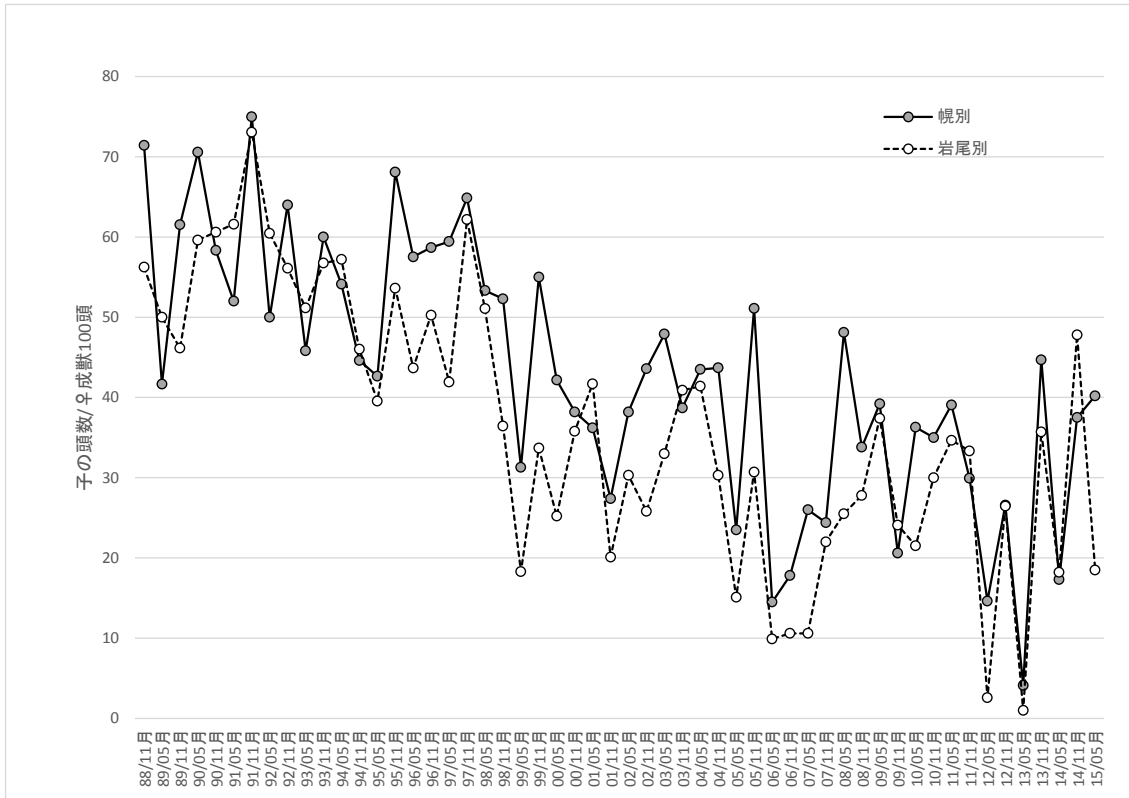


図6. 幌別・岩尾別地区の道路沿いに見られたエゾシカメス成獣 100 頭に対する 0 才個体数(100 メス比)の変化。

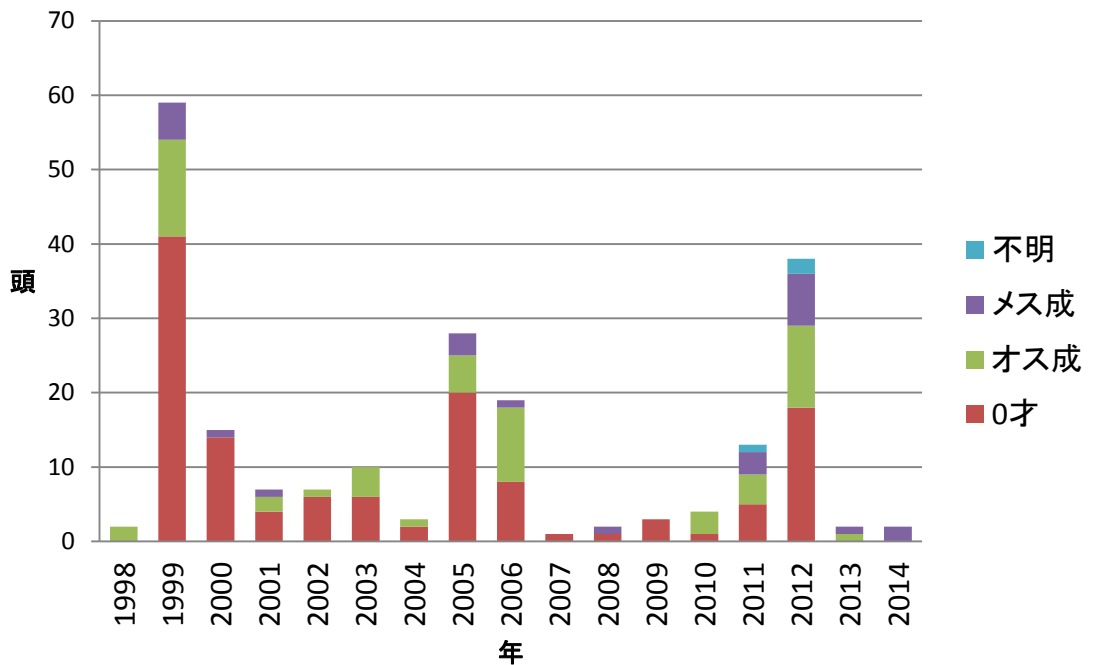


図7. 幌別・岩尾別地区で 1～5 月に確認したシカ死体数の経年変化。

ルサ・相泊地区:

2010年12月から実施の個体数調整の効果もあり、2013年以降、航空カウントでは捕獲実施前と比較して大幅に減少。一方で道路カウントでは、幌別・岩尾別地区同様100メス比は上昇傾向。

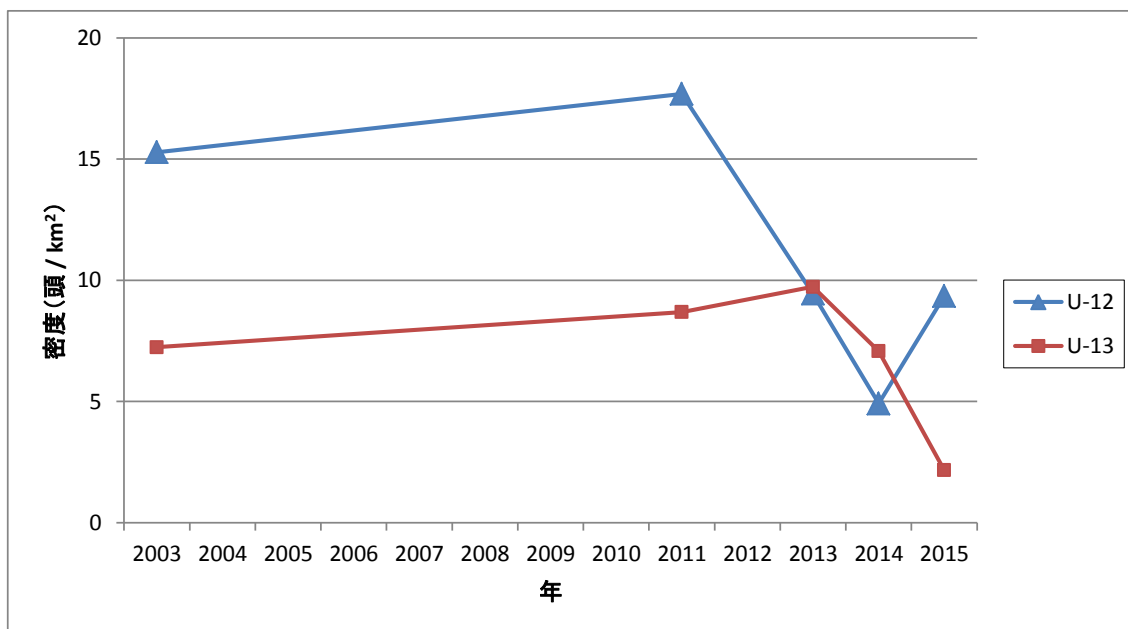


図5. ルサ・相泊地区(広義)の各調査区におけるエゾシカ発見密度の推移.

(U-12:モイレウシ〜相泊温泉, U-13:相泊温泉〜ルサ)

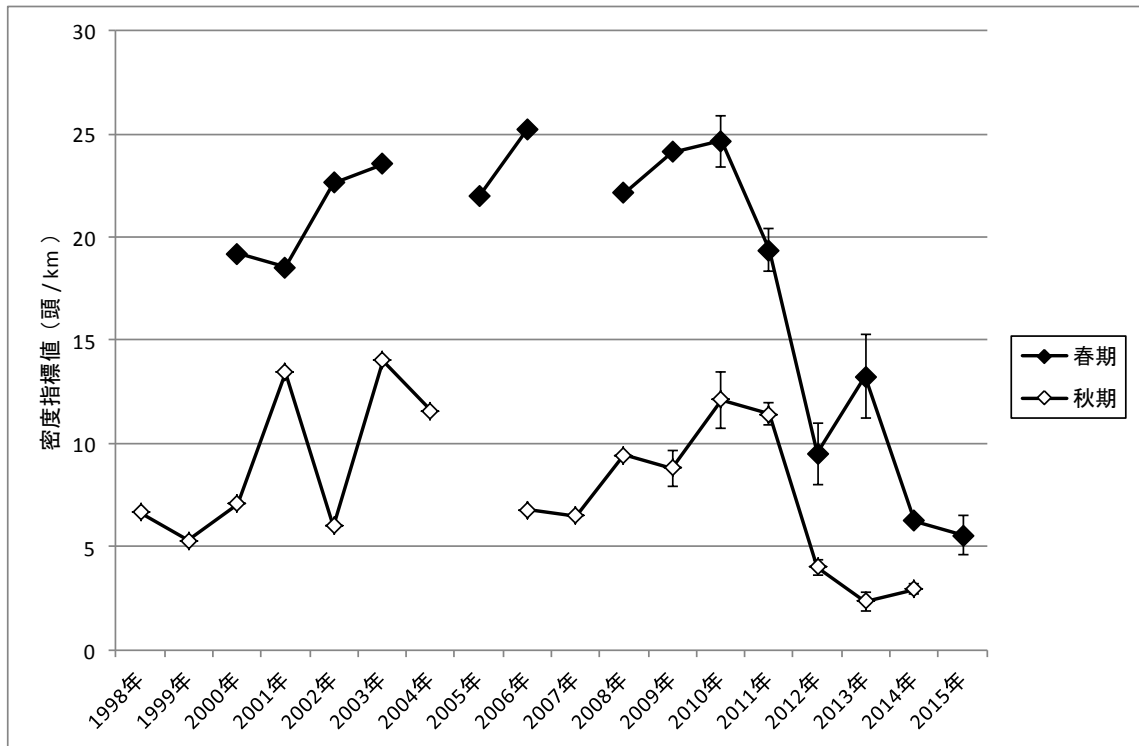


図6. ルサ・相泊地区の道路沿いに見られたエゾシカの距離当たり頭数の変化。2009年秋期以降は5夜の平均値と標準誤差を表す

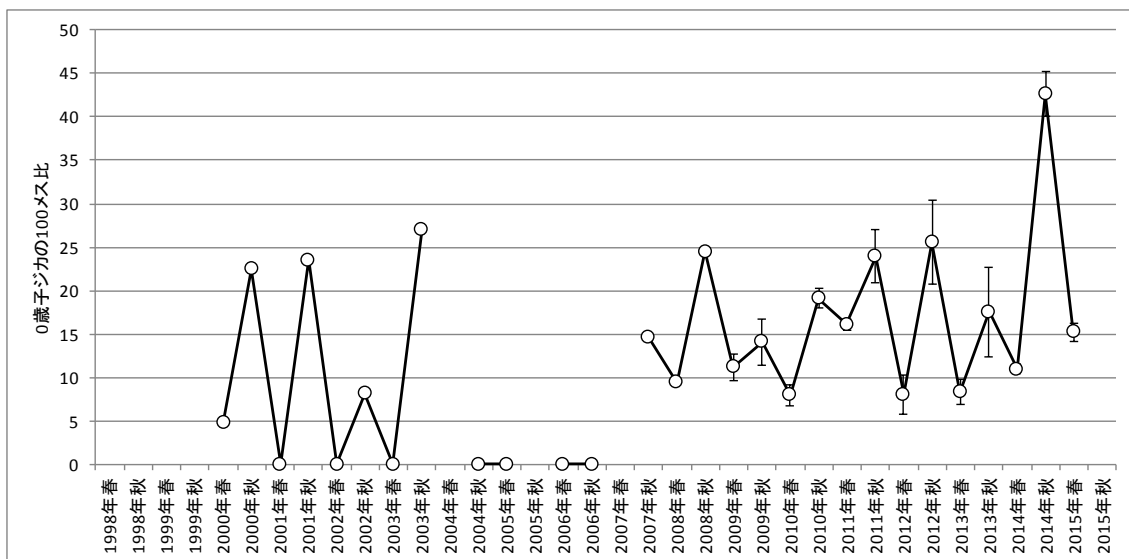


図7. ルサ・相泊地区の道路沿いに見られたエゾシカメス成獣100頭に対する0才個体数(100メス比)の変化。

○隣接地区： 遺産地域範囲外で、斜里側は金山川、羅臼側は植別川付近までを想定。
 本地域は斜里側、羅臼側に分かれる低標高地域である。以下にそれぞれ別項で取り扱う。

斜里側：

中断期間を設けた狩猟の継続で道路カウントでは保護区外で低下傾向。保護区内においては上昇傾向にあったが 2013 年 12 月以降実施の管理捕獲の効果か 2014 年度は低下。

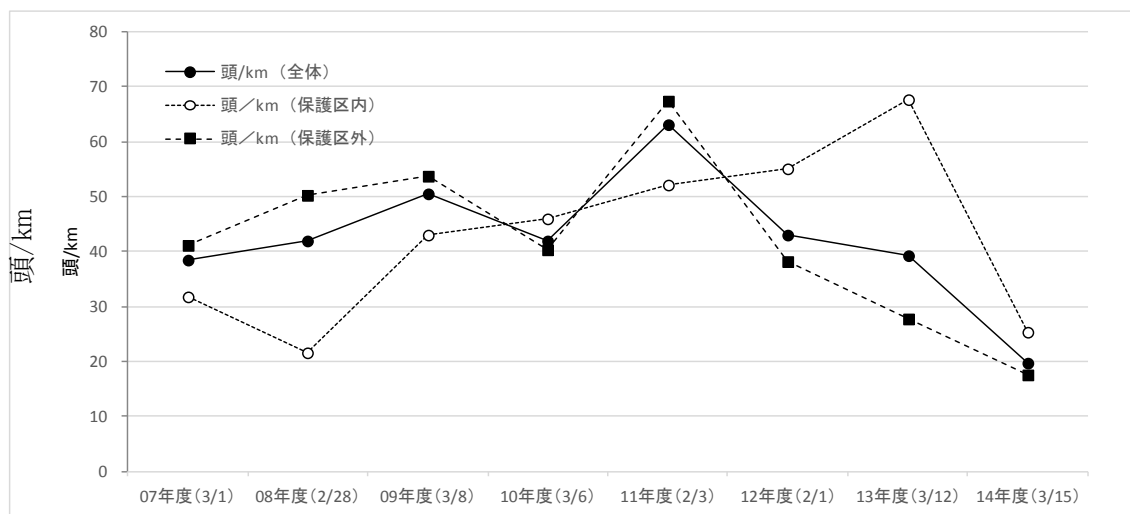


図 8. 真鯉地区の道路沿いに見られたエゾシカの距離当たり頭数の変化。鳥獣保護区内(オシヨコマナイ川～オベケブ川) : 3.5km 鳥獣保護区外(オベケブ川～オチカバケ川) : 8.5km

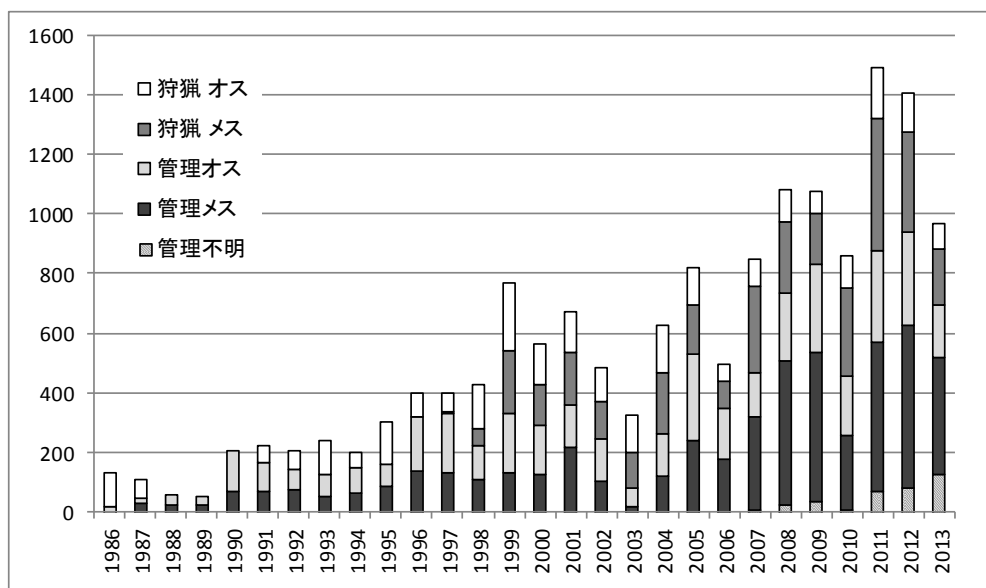


図 9. 斜里町におけるエゾシカの狩猟と管理による捕獲数(年度)の経年変化。隣接地区外を含む。(知床岬分は斜里町分として集計。)

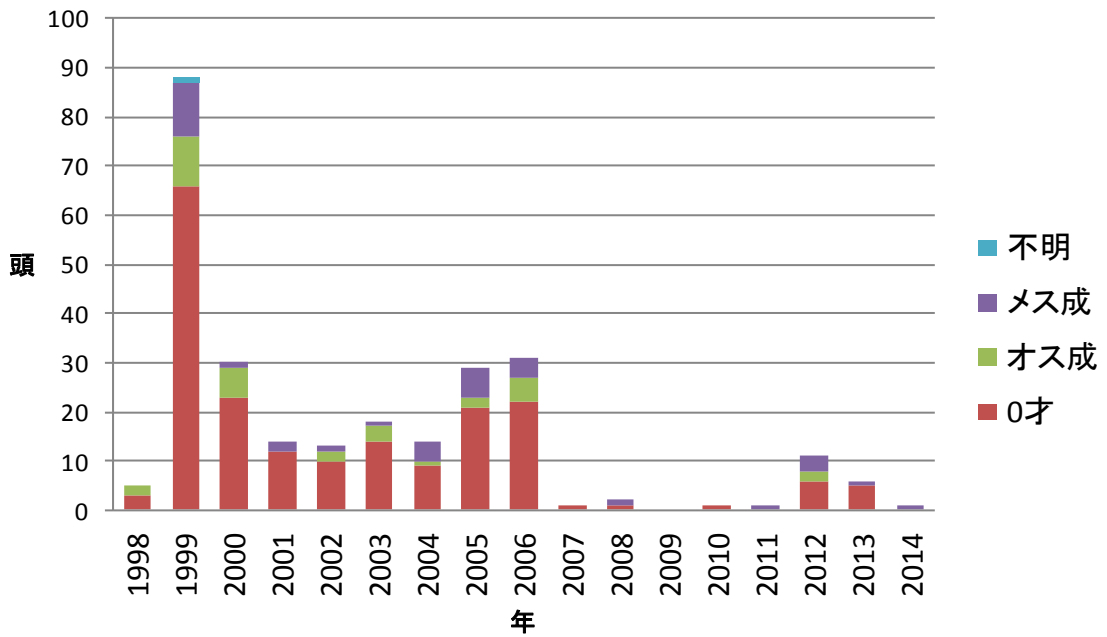


図 10. 斜里側の隣接地区で1～5月に確認したエゾシカ死体数の経年変化

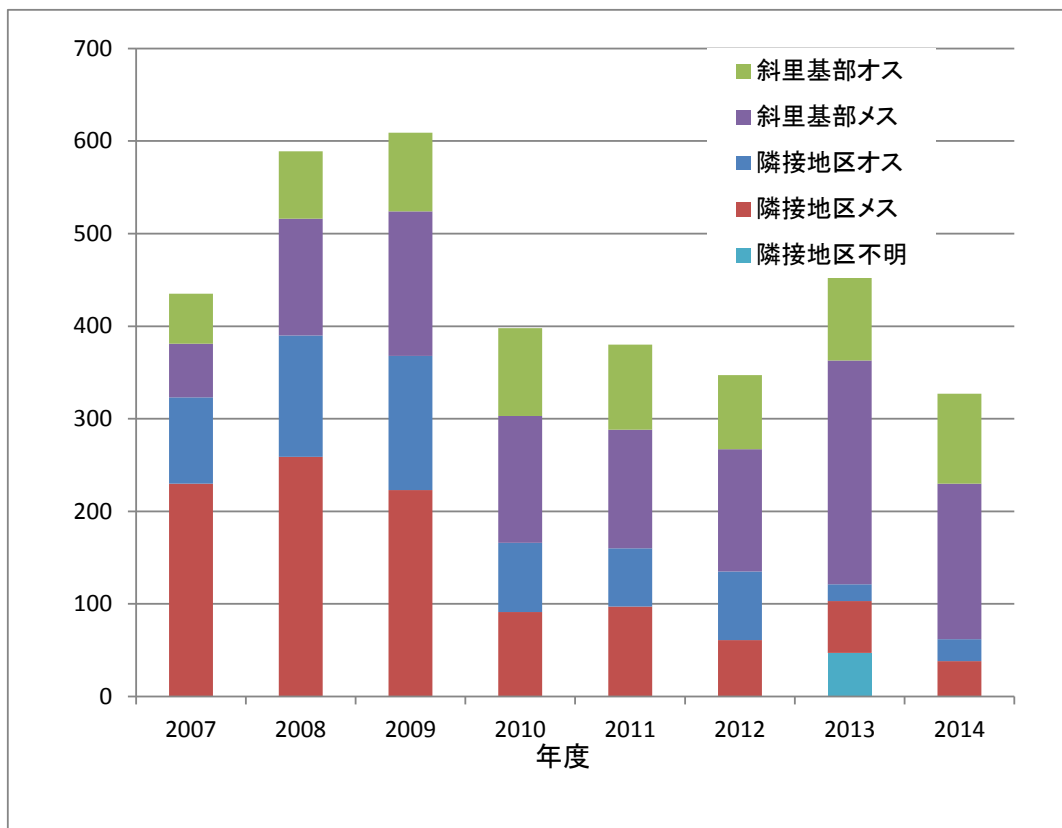


図 11. 斜里町の隣接地区内外で管理捕獲されたエゾシカの経年変化。

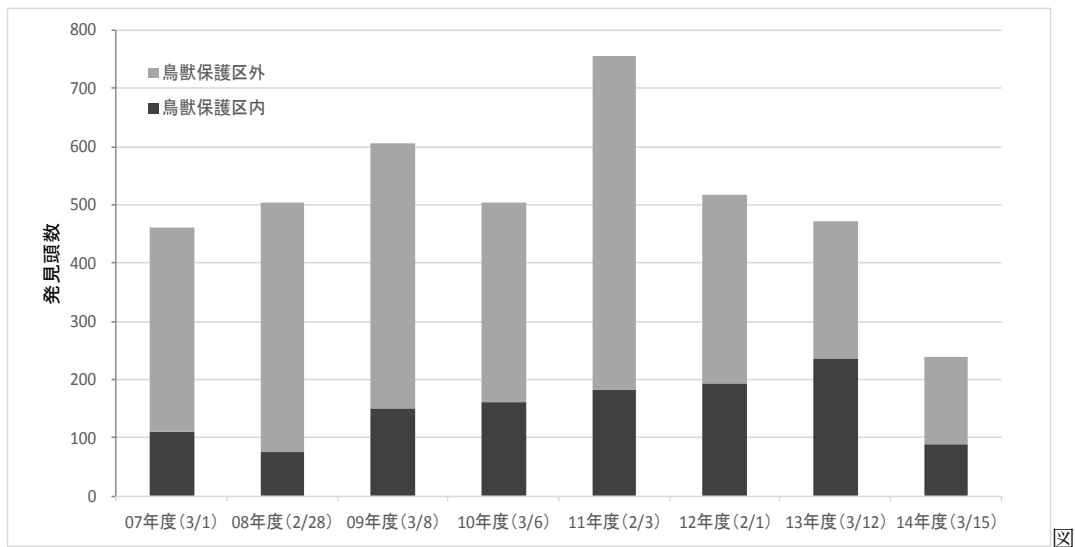


図 12. 真鯉地区の道路沿いに昼間見られたエゾシカ数の変化。

※数値は複数回実施した調査の中で、最大値が得られた日のデータを採用

※鳥獣保護区内(オショコマナイ川～オペケプ川):3.5km.

鳥獣保護区外(オペケプ川～オチカバケ川):8.5km.

羅臼側:

対象地域の中で越冬密度は最も低い。狩猟と管理捕獲により、一定の捕獲圧は維持されている。個体数の動向に関する情報乏しいが、減少傾向か。

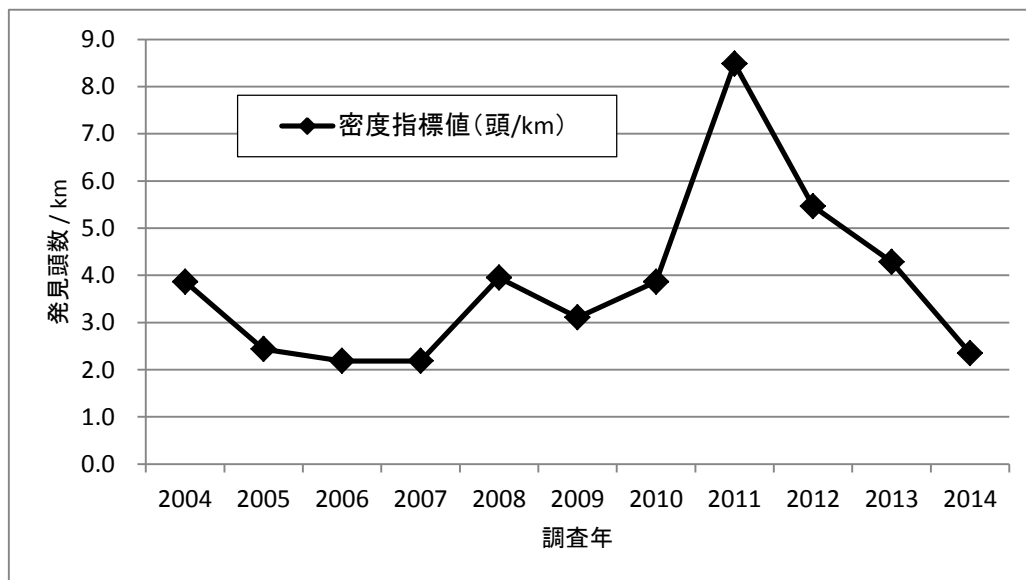


図 13. 羅臼側隣接地区(峯浜)の道路沿いで見られたエゾシカの距離当たり頭数の変化(北海道:調査は1夜のみ、牧草地コース)。

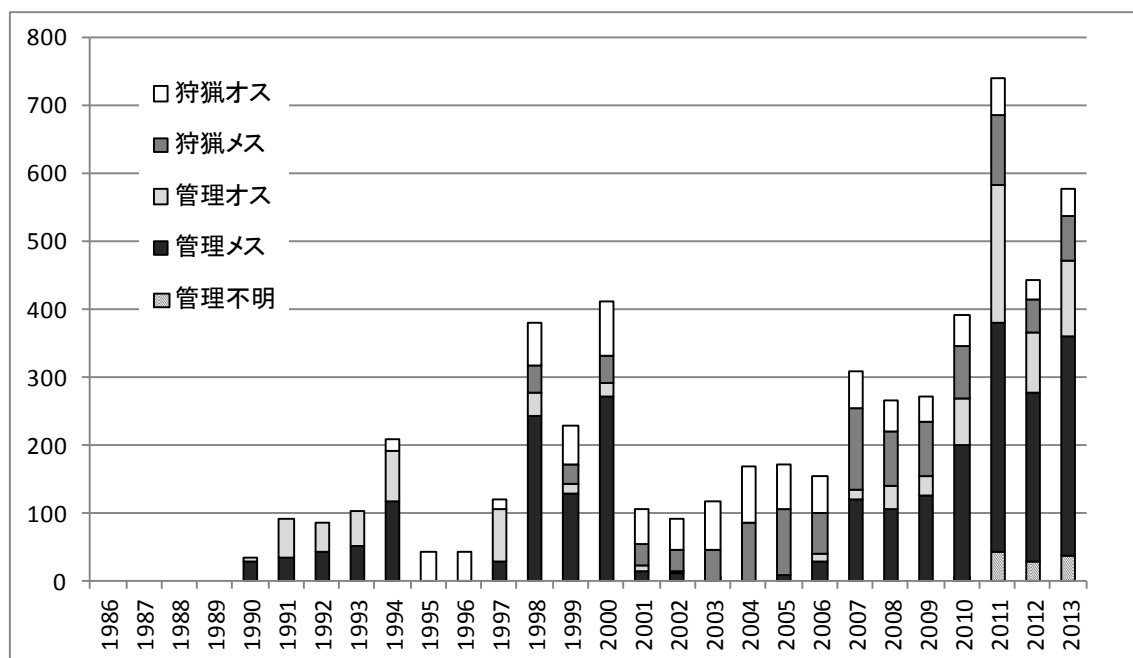


図 14. 羅臼町におけるエゾシカの狩猟と管理による捕獲数の経年変化。

※知床岬地区の捕獲は斜里町分として集計。 ※年度集計

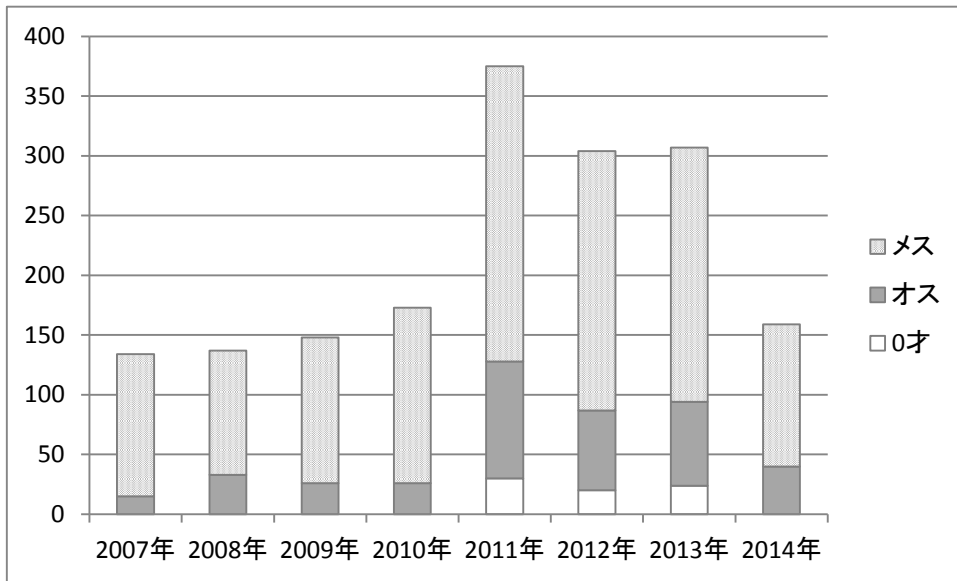


図 15. 羅臼町内の隣接地区におけるエゾシカの管理捕獲(羅臼町・北海道森林管理局)による捕獲数の経年変化(年度)。北海道森林管理局による捕獲(囲いワナ)は2010～2013年に実施。

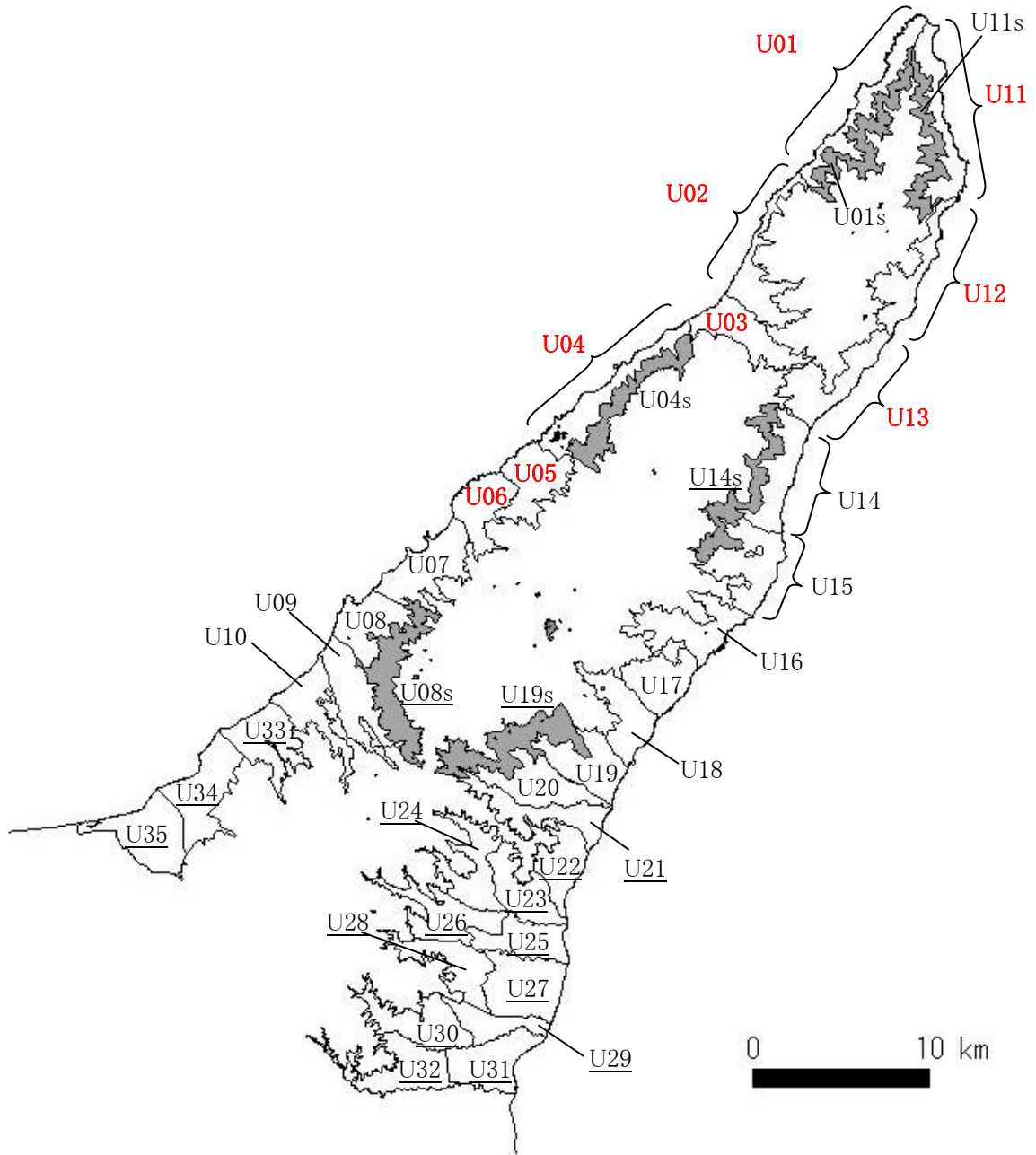
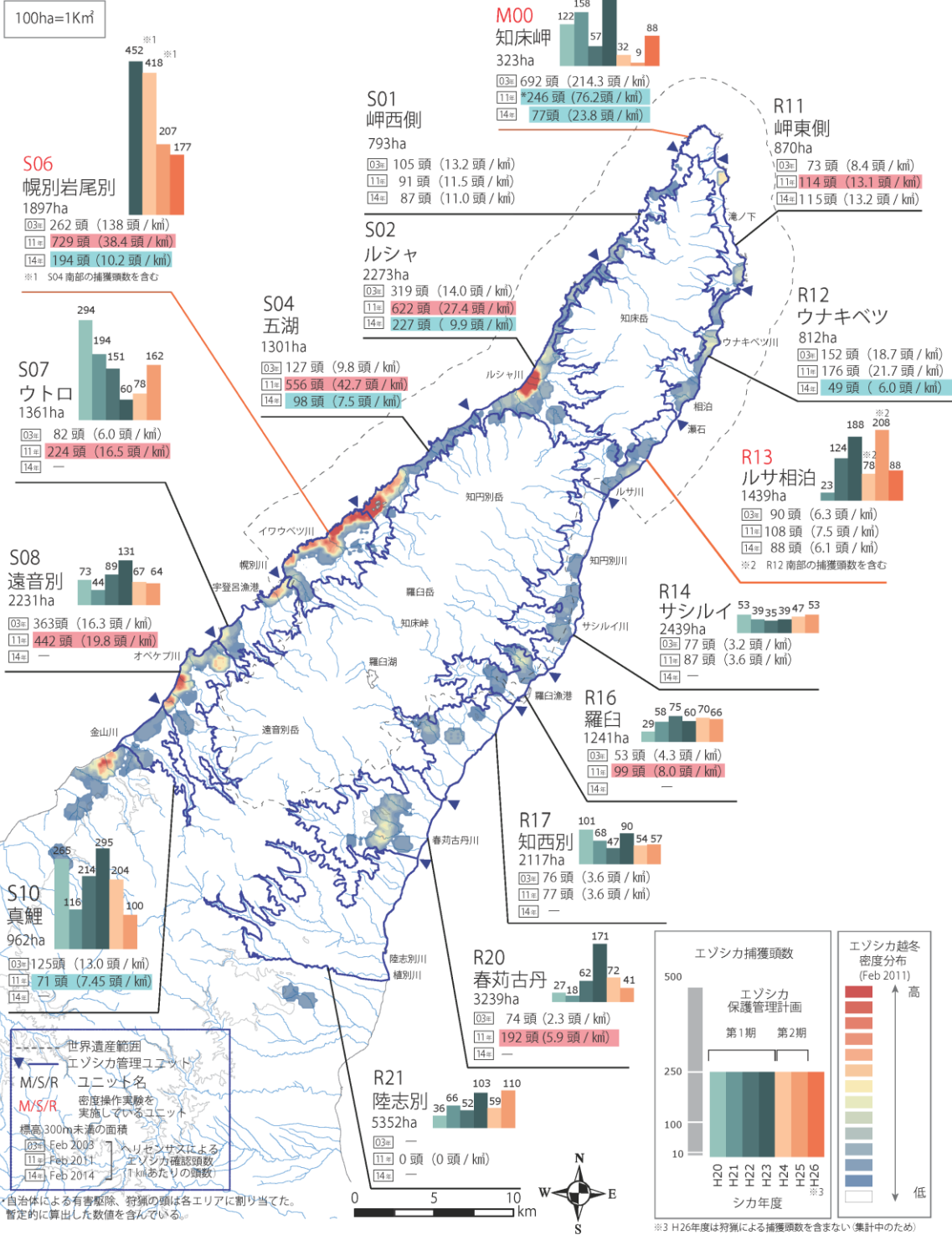


図 16. 知床半島におけるエゾシカヘリカウント調査の調査区

知床半島エゾシカ保護管理概要図

ver.2015. 8.25



知床半島エゾシカ保護管理概要図付表

データ提供・整理 北海道環境科学センター、さっぽろ自然調査館、知床財団

150826夜 改訂作業中

管理 区名	エリア	モニタリング ユニット	ヘリセンサス ユニット	センサス 面積(ha)	ヘリカウント結果 (シカ年度表示)					捕獲 種類※ 実施主体	捕獲手法	シカ年度										
					2002	2010	2012	2013	2014			計画策定 以前 2002~06 H14-18	第1期 保護管理計画					第2期 保護管理計画				
													2007 H19	2008 H20	2009 H21	2010 H22	2011 H23	第1期 計	2012 H24	2013 H25	2014 H26	
特	M00 知床岬	1,11	323	692	*246	68	77	139	環	巻狩り	0	132(89)	122 (76)	158(86)	57(20)	216(133)	685(404)	32(4)	9(2)	88(43)		
A	S01 岬西側	1	793	105	91	32	87	35			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	S02 ルシヤ	2,3	2,273	319	622	-	227	254			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	R11 岬東側	11	870	73	114	50	115	79			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	R12 ウナキベツ	12	812	152	176	94	49	93			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
	S04 五湖	4	1,301	127	556	83	98	63			0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
B	S06 標別-岩尾別	5,6	1,897	262	729	231	194	121	環	流LSS	0	0	0	0	309(174)	309(176)	237(127)	2(1)	15(9)			
										くくりワナ	0	0	0	0	58(35)	58(35)	0	0				
										囲いワナ(標別)	0	0	0	0	85(36)	85(36)	0	83(46)	94(55)			
										囲いワナ(岩尾別)	0	0	0	0	0	0	181(124)	35(7)	22(9)			
										大型仕切り柵(岩尾別)	0	0	0	0	0	0	0	87(56)	46(21)			
	標別-岩尾別小計	0	0	0	0	0	0	452(247)	452(247)	418(251)	207(110)	177(94)										
	R13 ルサ-相泊	13	1,439	90	108	121	88	27	環	固定SS	0	0	0	23(14)	24(12)	0	47(26)	0	0			
										流LSS	0	0	0	0	53(23)	53(23)	61(34)	78(46)	52(32)			
										囲いワナ(ルサ)	0	0	0	0	100(37)	91(32)	191(69)	17(8)	14(5)	36(17)		
										巻狩り	0	0	0	0	0	29(22)	29(22)	0	0	0		
囲いワナ(昆布浜)										0	0	0	0	0	15(7)	15(7)	0	0	0			
ルサ-相泊小計	0	0	0	0	23(14)	124(49)	188(84)	335(147)	78(42)	208(125)	88(49)											
B、隣接	R14 サンルイ	14,15	2,439	77	87	-	-	-	羅	巻狩り等	20	74	53	39	35	240	47	53	26			
R16 羅臼	16	1,241	53	99	-	-	-	羅	巻狩り等	26	18	29	58	75	60	240	70	66	40			
隣接	S07 ウトロ	7	1,361	82	224	-	-	-	斜	銃など	623	98	138	98	118	60	512	78	30	34		
									林	囲いワナ	0	126	156	96	33	0	411	0	91	7		
	S08 遠音別	8,9	2,231	363	442	-	-	-	斜	銃など	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
									林	囲いワナ	0	0	0	0	0	0	0	0	41(15)	0		
									林	MC・巻狩り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7		
									狩		21	172	73	44	89	131	509	67	64	0		
	S10 真鯉	10	962	125	71	-	-	-	斜	囲いワナ	62	70	161	45	54	73	403	35	0	0		
									林	囲いワナ・箱ワナ・巻狩り	0	0	0	0	0	0	0	0	29			
	R17 知西別	17,18	2,117	76	77	-	-	-	狩		192	119	104	71	160	222	676	169	100	0		
									羅	巻狩り等	0	42	47	35	13	58	195	28	38	26		
	R20 春刃古丹	19-21	3,239	74	192	-	-	-	狩		161	62	54	33	34	32	215	26	19	0		
									羅	巻狩り等	0	0	8	0	34	53	95	8	27	14		
	R21 陸志別	22-26	5,352	-	0	-	-	-	林	囲いワナ	0	0	0	0	4(4)	96(42)	100(46)	56(30)	0	0		
									狩		108	32	19	18	24	22	115	8	14	0		
								羅	巻狩り等	0	0	16	12	69	97	36	44	5				
								狩		258	62	36	50	40	34	222	23	66	0			
											1,477	1,007	1,000	784	906	1,805	5,502	1,179	1,077	618		
注) ※密度操作実験を実施しているモニタリングユニット名は赤字 ※括弧内の数字はメス成獣の捕獲頭数 ※囲いワナの「捕獲頭数」は、生態系から除去した「搬出頭数」である。搬出した標識個体や搬出前逃走個体は含まない(×のべ捕獲頭数)。 ※年次データは基本的にシカ年度(6月-翌5月)で集計。ヘリセン実施年もシカ年度表記で統一(150716)。実際のヘリセン調査は2-3月に実施(2002シカ年度→2003年3月実施)。原則、捕獲開始の直前日にヘリカウント。 ※有害駆除、狩猟の捕獲頭数は各ユニットに推定で割り当てた。暫定的に算出した数値を含んでいる。**は未集計 ※捕獲実施 環=環境省事業 林=林野庁事業 斜=斜里町有害駆除 羅=羅臼町による有害駆除 狩=狩猟による捕獲 ※ヘリカウント結果:ピンク=増加傾向、ブルー=減少傾向を示す 仮置きで、前年比25%以上の増減あれば着色する ※2011ヘリカウント結果記載の*246頭はセサナによるカウント数。ヘリセンサスは捕獲実施後に行われたため、ヘリによるカウント数は1頭のみ(U-11側のM00)だった。 センサス対象面積はセサナの方が狭いが、捕獲前に実施したセサナカウント数ここでは採用した。																						↑ 知床財団 関与のみで 430頭(メス成獣218)
																						未集計分

別表-3 エゾシカ保護管理計画に基づき実施した事業(モニタリング)

区分	第1期(2007~2011年度)				第2期(2012~2016年度)			
	調査項目	実施主体	内容・目的	結果概要	今後の課題等	結果概要	今後の課題等	
モニタリング調査	植生回復調査	環境省 林野庁	エゾシカ捕獲圧の強度や植生保護柵の配置・規模の再検討のため、主要越冬地等に設定した各種植生調査プロット及び防鹿柵内外の植生調査を行い、特定植物種とエゾシカ増減との対応関係や植生の回復状況などを把握する。	2003年、2004年に知床岬の3箇所(15m×15m、エオルシ基部遮断、20m×20m)の植生保護柵を設置した。いずれの柵内でも植生の大幅な回復が認められるが、特に山地高草本群落での回復が顕著である。また、柵外でも密度操作実験により若干の回復傾向が見られる。 知床岬(2004年)、幌別(2003年)、岩尾別2箇所(2008年)にて林野庁の1ha柵が設置されている。柵内では比較的大きな稚樹や広葉樹の稚樹の生育、およびササ類の被度や高さが大きいことが確認されている。	継続した調査の実施。 植生指標の開発。	ガンコウラン群落・高草本群落の3箇所の保護柵を用いた試験では、シカを排除してから10年以上の植生の回復の変遷を把握することができた。その結果、回復の指標としてクサフジ、オオヨモギ、ヤマブキシヨウなどの種を抽出できた。一方、柵外でも個体数調整の効果が見られ、ササ類の高さの回復や指標種の回復が見られている。 林野庁の森林囲い区では、下枝・稚樹・林床植生とも回復が見られ、特に幌別地区で顕著である。柵外ではわずかに回復傾向が見られるが、草原に比べて個体数調整結果に対する反応は遅く、大きなタイムラグが生じると推定される。	確立した指標種を用いた簡易的なモニタリングの実施、個体数調整の効果の検証。	
	密度操作実験対象地域 シカ採食圧調査	環境省	エゾシカ許容密度(各越冬地の捕獲目標数)の検討のため、密度操作実験を行う越冬地に採食圧調査プロットを設定し、エゾシカの密度変化に対する植生の変化を把握する。	知床岬においてイネ科草本の現存量と採食量、クマイザサの被度と高さの調査を実施している。2009年までの調査においては、イネ科草本やササについては増加傾向が見られた。2010年の調査では、イネ科の現存量については増加が示唆されたが、クマイザサにおける明らかな増加傾向が確認されないといった結果が得られた。	継続した調査の実施。 植生指標の開発。	知床岬など3地区においてイネ科草本の現存量と採食量、クマイザサの被度と高さの調査を実施している。 イネ科草本の草量は2013年以降はやや減少傾向で、回復が見られなくなった。 ルサ相泊地区では、採食量は捕獲圧の高いルサ地区で小さい傾向が見られた。 幌別岩尾別地区では、採食量は増加傾向で捕獲の効果が不明確であったが、草量は2014年には全体的な回復傾向が見られた。	草量計を用いた簡易的な回復傾向把握のためのモニタリングの実施	
	シカ採食圧広域調査	環境省 林野庁	半島全体でのシカ採食圧の把握のため、地域別・標高帯別・立地別のシカ採食圧状況(木本・草本)を広域的に把握する。	知床半島全域に61箇所の調査区を設置し、森林植生を対象とした毎木調査、植生調査を実施した。知床岳や知床連山等の標高300m以上の調査区においても、エゾシカによる影響が確認された。半島先端部ほど、また斜里町側では知床五湖から幌別台地にかけてエゾシカの影響が強いことが示された。	継続した調査の実施。 調査手法や実施頻度、調査地点の再検討。	知床半島全域に61箇所の調査区を設置し、森林植生を対象とした毎木調査、植生調査を5年に1回の頻度でモニタリングしている。エゾシカの強い採食圧の影響を受けて植生が改変されており、回復もほとんど見られていない。	継続した調査の実施。	
	在来種分布調査	環境省	保護対象種(群落)、防護柵の設置場所・規模等及び越冬先でのシカ捕獲数の検討のため、レッドリスト掲載種、その他希少植物種を含む在来種の分布(種・群落の両面)、規模、またレフュージの有無等について広域的に把握する。	斜里側のカムイワッカから知床岬、羅臼側の相泊から知床岬までの区間の海岸線において、1m~4mの方形区を計95箇所設置した。斜里側は急斜面や断崖などの地形的な条件からエゾシカのアプローチが難しく、レフュージも多数確認した。一部、ルシャ河口付近などアプローチが比較的容易な箇所では採食によって大幅に植生が変化していた。羅臼側はアプローチが容易な地域が多いため、採食圧は随所で確認された。一方で斜面上部のアプローチが難しく種子供給源となっておりと思われる場所や、採食のほとんど見られない保存状態のよい地点も確認された。	在来種の分布状況は把握できたため、今後は広域採食圧調査を実施するなかで、海岸植生の変化をモニタリングする。	2014年にルシャ地区、2015年にウナキベツ地区の海岸植生調査区のモニタリングを実施した。ルシャ地区は、エゾシカの強い採食圧により植生がすでに変化していた調査区で、その状態が維持されていた。	アプローチにコストを要する調査区のモニタリングの実施	
	シカ生息動向調査	環境省 斜里町 羅臼町 知床財団	捕獲実施方法の検討(実施時期、捕獲数等決定)のため、主要越冬地においてライトセンサスや航空機からのカウント等を行い個体数の増減傾向及び群れ構成等を把握する。	幌別・岩尾別地区の道路カウントでは5-15頭/km程度に安定しているが、百メスは不安定。0歳子の生存率に年変動が大きい。 ルサ相泊地区では非越冬期には12-20頭/km程度で安定しているが、越冬期には最大50頭/km程度まで増加する。季節的变化はみられるが、経年では安定している。 知床岬地区の航空カウントでは密度操作実験により越冬数が2008年度の半数以下に減少。	継続した調査の実施。 航空カウントは捕獲による攪乱をどう評価するかが課題。 実施頻度等の再検討も必要と考えられる。	特定管理地区知床岬では管理捕獲の効果により2008年度と比較して大幅減少。 A地区については生息動向に大きな変化はみられない。 B地区幌別岩尾別地区・ルサ相泊地区では管理捕獲の効果もあり、10頭/km未満に減少。一方で0歳子の生存率は回復傾向。 隣接地区においても、狩猟や管理捕獲の効果で減少傾向。	定期的な調査を長期にわたり継続できるかが課題。	
	自然死亡状況調査	知床財団	捕獲実施方法の検討(実施時期、捕獲数等決定)のため、主要越冬地における自然死亡個体の年齢・性別頭数を把握する。	知床岬地区では、2007年以降、0-2頭の自然死亡を確認。ただし、クマによる被食もありこの値は過小評価の可能性あり。 幌別・岩尾別地区では、2007年以降、1-4頭の自然死亡を確認。両地区ともに2007年以降、自然死亡数が少ない状態が続いている。	クマによる被食の影響もあり、継続的に実施するか再検討が必要と考えられる。	知床岬地区ではごく少数にとどまる。幌別岩尾別地区では2012年に40頭近い自然死亡を確認、1998年の町再開以降、1999年、2005年に次ぐ数となった。	クマの被食の影響については評価を行う上で依然課題となっている。	
	越冬群分布調査	環境省	捕獲実施方法の検討(実施時期、捕獲数等決定)のため、ヘリセンサスによる越冬群の分布・規模等を把握(半島規模の生息数推定も合わせて実施)する。	半島全域の標高300m未満の地点で、合計3930頭のエゾシカを確認。うち、斜里側は3045頭、羅臼側は885頭であった。一方、標高300m以上の地点ではほとんど確認されなかった。2003年と比較して、知床岬では減少、五湖からカムイワッカ地域では増加傾向が見られた。	定期的に実施する体制づくり。	半島全域調査は2015年3月実施予定。管理捕獲実施地区を中心とした部分調査では2011年との比較で、先端部では横ばいからわずかに増加。ルシャ地区、幌別岩尾別地区、ルサ相泊地区で減少傾向。	継続した効率的な調査の実施。	
	シカ季節移動 移動分散に関する調査 (ルサ・ルシャ)	環境省	個体群管理に向けた地区区分設定のため、電波発信器等を用いて各越冬群の季節移動状況の詳細情報を把握する。	ルサ・相泊地区で2008年度に標識したメス成獣で死亡・行方不明の2頭を除く20頭のうち、16頭は定着型、残り4頭中、3頭は南下し標津町まで、1頭は北上しウナキベツ中流へ移動して非越冬期を過ごしていた。	知床岬、幌別・岩尾別、斜里側隣接地区では2004年、2005年に実施済み。今後、当面は調査を実施しない予定。	ルシャ地区において2014年4、8月、11月に10頭メス成獣に標識、1年目の結果ではきわめて強い定着性を示した。調査継続中。	越冬個体の標識付けは未実施のため、越冬個体群の季節移動の把握が課題。	
	土壌侵食状況調査	環境省	土壌侵食の実態及び原因を把握する。	知床岬地区での調査では、エゾシカによる土壌侵食の顕著な拡大は確認されていない。	知床岬での調査間隔の拡大と、他地域での実施を検討する必要がある。	知床岬地区での調査では、エゾシカによる土壌侵食の顕著な拡大は確認されていない。		
	土壌侵食状況広域調査	環境省 林野庁	広域的な土壌侵食の発生場所、規模等を把握する。	顕著な拡大等は確認されていない。	継続的な調査の実施。	顕著な拡大等は確認されていない。		
	シレットコスミレモニタリング調査	環境省	高山帯におけるシレットコスミレの採食状況を把握する。	2008年に知床硫黄山において初めてエゾシカの採食痕を確認。遠音別岳については採食痕は確認されていない。その後、知床硫黄山においても、被害の拡大は認められない。		2011年に被害確認後、2014年、3年ぶりに20株の被採食株を確認した。		
	実行計画の策定や見直しにあたって必要な調査	密度操作手法検討調査	環境省	捕獲実施の具体的な手法について、技術面、安全面、コスト面等の詳細な検討を行う。	知床岬地区において、狙撃、巻狩りなどを試行した結果、巻狩りが最も効率的な捕獲手法であることが明らかとなった。今後、さらなるコスト削減のため仕切り柵を用いた捕獲手法を試行する。	個体数調整のみではなく、防衛的手法、越冬環境改変も含め、必要に応じて実施。	知床岬地区において仕切り柵を活用した捕獲は確立。幌別岩尾別地区では大型囲い柵による捕獲を新たに実施。その他高架木道上からの狙撃捕獲を試みるが、誘引に課題が残った。	低密度化後、低コストで維持するための手法確立が急務。
		越冬地シカ実数調査	環境省 知床財団	捕獲数の検討のため、越冬地全体、あるいはその一部区域のシカを追い出し、実数を把握する。	見落とし率の算出等では2003年度調査結果を準用、再調査の予定なし。 2006年の知床財団の調査では、見落とし率は73%であった。	当面は調査を実施しない予定。	実施していない。	
その他	年輪・花粉分析調査	環境省	人為的管理の程度の検討のため、過去数百年~数千年前までのエゾシカと植生の長期的な関係を解明する。	年輪分析では、岬地区では約270年間、幌別・岩尾別地区では約370年間、エゾシカ密度が現在ほど高い時期はなかったと推察された。 花粉分析については、分析結果にばらつきがあり、明確な傾向は見られず。	現状では新規分析計画なし。 第2期計画では項目の削除が適当と考えられる。	実施していない。		
	鳥類相・昆虫相調査	環境省 酪農学園大	2010-11年に知床岬地区などにおいて昆虫相の把握と今後の調査手法を検討する調査を実施した。また、知床岬の鳥類相の変化については、継続的に繁殖期の調査が実施されている。		2013年に知床岬の繁殖期の鳥類相を調査した結果、草食性鳥類の回復傾向が見られたが、依然としてエゾシカによる植生改変の影響を強く受けている種の存在が判明した。 2012年に指標となること期待される地表性昆虫と訪花昆虫の調査をエゾシカの影響が異なる複数の地区を対象に実施した。その結果、エゾシカの採食圧下ではマルハナバチ類が減少するなど、いくつかの傾向が得られた。	指標種を選定し、効果的なモニタリングを継続して実施する。		